序

年に2回発行される『政治学研究』は、偶数号が三田祭論文、そして奇数号が卒業論文を中心に構成されている。本61号には、卒業論文を元にした12本の論考が収録されている。

これまで様々な論文を書いてきたプロの研究者の目から見ても、卒業論文は他のタイプの論文と比べて書くのが難しく思われる。本格的に専門分野の勉強を始めてまだ間もない段階で、多くの場合は4年生の1年間だけ――それも、就職活動にそれなりの時間をとられながら――で完成させなければならないからである。この条件は、あるいは修士論文よりも厳しいかもしれない。とくに政治学科では卒業論文が卒業要件に含まれていないため、最終学期を待たずして卒業要件を充足した学生諸君にとっては、研究・執筆の動機づけを維持すること自体がしばしば困難である。そんな中で論文を完成させた、本誌の収録論文の執筆者を始めとする塾生諸君に心から敬意を表し、お祝い申し上げたい。

論文執筆は、基本的に地味で孤独なものである。しかし、たとえ文献の山や各種の資料・データと一人で格闘した結果であっても、学術論文が決して社会と隔絶したものではないということを、執筆者諸君は感じとったのではないだろうか。学術論文というのは、平たく言えば「まだきちんとした答えの出ていない、興味深い問いについて、誰もしたことのない形で、しかし誰でも納得できる理屈と証拠を提示して、答えを出すこと」である。つまり、論文は孤独に書かれるかもしれないが、その研究上の問いは執筆者だけでなく他人にとっても興味深いものでなければならないし、その論証もまた、他人からみて納得のいくものでなければならないのである。論文は、他者に開かれていなければならないのである。

実はこの点で、論文執筆は陸上競技や競泳などの、記録を競うタイプの

競技に似ている(前回執筆の第59号に続く、スポーツの喩えで恐縮である)。 およそ全ての論文にはオリジナリティがなければならず、その意味で、何 らかの世界新記録を樹立するものでなければならない。また、どの競技も 多かれ少なかれ他者に注目されて成立するという意味で、論文の研究テー マや問いは、単なる個人の趣味・道楽でなく、他人にとっても意味を持つ ものでなければならないのである。しかも、論文執筆の場合、自分のテー マや問い(いわば競技種目)の存在意義や、自分の主張のオリジナリティ(つ まり世界新記録を出したこと)まで責任を持って主張しなければならないと きている。

このように、論文は一人で書くものであっても、決して独りよがりであってはならない。そこで助けとなるのが、研究会の仲間や指導教員のサポートであろう。論文を完成させた皆さんは、自らの知的成果を大いに誇る資格を持っている。ただ、それだけでなく、自分の卒業論文が、その執筆の過程も含めて、どのように社会と結びついているのかについても思いを馳せていただければと思う。

完成に周囲のサポートを要するのは、本誌も同様である。末筆ながら、本61号の編集を担当された『政治学研究』編集委員会の委員の皆さん、とくに政治学科ゼミナール委員会を代表して原稿の募集などに力を尽くされた加藤瑠莉さんと後藤優佳さん、また慶應義塾大学出版会で編集を担当された堀井健司氏に心より御礼申し上げる次第である。

2019年2月28日

法学部教授·法学部学習指導 岡山 裕